五雲会

二〇一九年七月二十日（土）
開演 十二時（正午）
開場 十一時
於 宝生能楽堂

12:00 氷室

天女 上野 能寛
ツレ 木谷 哲也
シテ 藪 克徳

ワキ 福王 和幸
大鼓 高野 彰　太鼓 梶谷 英樹
小鼓 飯冨 孔明　笛 藤田 貴寛
間 前田 晃一
後見 野月 聡　高橋 憲正　田崎 甫
地謡 今井 基　金野 泰大　佐野 弘宜　佐野 玄宜　小倉伸二郎　佐野 登　山内 崇生　東川 尚史

13:30 不腹立

高澤 祐介　三宅 右矩　倉田 周星
後見 金田 弘明

〈休憩十五分〉

14:10 藤

シテ 亀井 雄二

ワキ 野口 能弘
大鼓 飯嶋六之佐　太鼓 小寺真佐人
小鼓 野中 正和　笛 小野寺竜一
間 三宅 近成
後見 武田 孝史　水上 優
地謡 藤井 秋雅　辰巳 和磨　金森 隆晋　辰巳大二郎　小倉健太郎　金井 雄資　藤井 雅之　當山 淳司

〈休憩十五分〉

15:55 来殿

シテ 朝倉 大輔

ワキ 安田 登
大鼓 大倉慶乃助　太鼓 澤田 晃良
小鼓 船戸 昭弘　笛 熊本俊太郎
間 金田 弘明
後見 宝生 和英　朝倉 俊樹
地謡 金井 賢郎　川瀬 隆士　金森 良充　内藤 飛能　小林 晋也　大友 順　渡邊 茂人　和久荘太郎

終演予定 十六時四十五分頃

演目の解説

能「氷室」（ひむろ）
亀山院に仕える臣下が氷室山に立ち寄ります。氷室の様子を初めて見た臣下が、氷室守の老人に春夏までも氷の消えない理由を尋ねると、老人はそもそも氷室が発見された時のこと、大君の徳により氷が守られていることを語り、今宵氷調（ひつき）の祭りを見せようと言って塚の中に姿を消します。夜になり天女が出現して天女の舞を舞うと、塚の中より氷を持った氷室の神が現れ、氷を臣下に託すと豪快に舞います。

狂言「不腹立」（はらたたず）
在所のお堂を守ってくれる住持をさがしに出た村の有志二人が見つけたのは、あやしい俄か坊主でした。彼は「腹立てずの正直坊」と名乗るので、ためしにからかってみると、最初は必死に我慢していましたが、とうとう怒り出してしまい…。

能「藤」（ふじ）
越中氷見の里へやって来た僧が、花盛りの藤と松の歌を口ずさむところに、美しい女が現れ、ここは藤の名所なので、松の名を立てた歌よりも藤を賛美する歌があるでしょうにと、僧の心根を柔らかくたしなめます。女は実は藤の精であると名乗り、夕暮れの藤の陰に姿を消しますが、その夜の僧の夢に改めて美しい姿で現れ、春から夏へ移り変わる季節の中の藤の花の風情を讃え、花に戯れ、袖を翻して優雅な舞を舞って消え失せます。

能「来殿」（らいでん）
延暦寺の座主法性坊僧正による、百座の護摩の満参の日、夜半に表の戸を叩く音がします。不審に思った僧正が確かめると、そこには筑紫で死んだはずの菅相丞が立っていました。相丞は僧正の生前の厚誼を感謝し、数々の弔いに礼を述べながらも、無実の罪で流された事を恨み、遂に激昂すると妻戸に柘榴を投げつけ妻戸が燃え上がります。僧正が遮水の印を結んで火を消そうとすると、その煙の中に消え失せますが、後半では、大富天神と神号を賜って神霊となった相丞が、優雅な舞を舞います。

次回予告

二〇一九年九月十四日（土）
正午 始

通小町　水上 優
玉葛　小林 晋也
紅葉狩　東川 尚史

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会